

## にのへ牧羊物語



【ナレーション】  
いまから130年前の二戸には、新しい時代に先がけて、羊を飼育する、「牧羊」の仕事に必死で取り組んだ人がいました。その物語を、この上野牧羊場にある日本で一番大きい、アメリカススカケノキの下で、これからお話ししましょう。

## にのへ牧羊物語



【ナレーション】

江戸時代のおわりから明治時代にかけて、二戸地方、とくに福岡に住む、武士の若者たちが教育を受けた「会輔社(かいほしゃ)」という塾がありました。

その中に、蛇沼政恒(まさつね)という少年がいました。

政恒は、まだ9才で一番の年下。

厳しい規則の中、政恒は一生懸命に勉強し、その後も盛岡で開塾について学び、そして江戸でもたくさんの新しい事を学びました。



## にのへ牧羊物語



【ナレーション】

政恒が20才になった夏、明治維新が起こり、明治時代が始まりました。

その後、東京で暮らしていた政恒は、ある時こんなことを耳にします。

【町人】

「これから、日本人は洋服を着る時代になるそうだ。

国ではアメリカの専門家をまねいて、羊毛を生産するため、牧羊の研究が始ったらしいぞ。」

【ナレーション】

そのとき正恒の心には、生まれ育った二戸地方の広々とした風景が浮びました。

【政恒】

「牧羊か。やってみたい。

たしかに洋服になる羊毛を作るには、羊を育てなければならぬ。

これは今までになかった新しい挑戦だ。

誇りを持ってやれる仕事だぞ。」

## にのへ牧羊物語



【ナレーション】

こうして、意を決した政恒は、それまで日本人のほとんどが考えもしなかった、牧羊という仕事に取り組み始めることになったのです。

政恒はまず、東京にある牧羊場で、勉強をはじめました。

【政恒】

「夏と冬では、羊の飼い方は違うのですか？  
羊はどんな草を、どのくらい食べるのですか？  
病気になった場合の、薬の種類を教えてください。」

【ナレーション】

それから、親切に相談に乗ってくれる、会輔社の小保内(おぼない)定身(さだみ)と連絡をとり、二戸での牧羊計画をしっかりとすすめていきました。

そして約7ヵ月後、ついに政恒のもとに定身から

【定身】

「会輔社で、牧羊を取り組んでみることに決まったぞ！」

【ナレーション】

という、うれしい知らせが入り、二戸で羊を育てることが決まったのです。



## にのへ牧羊物語



【ナレーション】  
そこでまず、東京から二戸まで、羊を運んでくることになりました。

しかし、これからが問題です。  
一番の問題は、羊をどうやって運ぶかでした。  
東京から二戸までは、約6百80キロメートル。  
鉄道も車もない時代です。

【政恒】  
「よし歩いて行くしかない。」

【ナレーション】  
明治9年5月23日、政恒は、羊を15頭だけ連れて東京を出発しました。

しかし、羊は道路をまっすぐに歩きません。

【羊】  
「メエエ、メエエ！」

【村人A】  
「あの、メエメエ鳴く動物はなんだ？」

【村人B】  
「犬にしては大きいなあ。」

【村人C】  
「といっても、牛よりは小せえぞ。」

【村人A】  
「しかも、体にふさふさの毛があるぞ。」

【村人B】  
「見たことのおえ、へんな動物つれてきたもんだ。」

【ナレーション】  
周りの人たちは、初めて見る珍しい動物に目を見張りました。  
そして、ようやく政恒と羊が二戸に到着したのは、6月15日、なんと23日も後のことでした。

## への牧羊物語



【ナレーション】

待ちに待っていた会輔社の社員たちも、初めて見る羊の一行にはじめは驚きました。

そして、羊は新しい土地で元気に育ちはじめ、計画は、順調にすすんでいきました。

明治天皇が二戸に立ちよられた際には、

【明治天皇】

「牧羊は国の大切な事業であるから、ますます力を入れて頑張ってください。」

【ナレーション】

と、励ましの言葉がかけられました。

政恒は、体中から勇気がわいてきました。

【政恒】

「これは何としてでも、成功させなければならないぞ！」



## にのへ牧羊物語



【ナレーション】  
政恒と会輔社は、お金を集め、広い土地を買い、さらに30頭もの羊を増やしました。

そして、

【政恒】  
「牧羊の他に畑もつくらなくては！」

【ナレーション】  
と考えた政恒は、早速原野を耕して、大豆など作物の種をまいてみると、次の年にはたくさんの収穫ができました。

【政恒】  
「大豆殻(がら)や、粟(あわ)殻はえさにもなるし、それを敷けば保温材にもなるぞ。

よし！この仕事はうまくいくぞ！」

【ナレーション】  
と、明るい兆しが見えてきたその時、大事件がおきました。

## にのへ牧羊物語



【オオカミ】  
「ガウ、ガウ、ガウ！」

【羊】  
「メェ…、メェ！」

【オオカミ】  
「ガウ、ガウ！」

【村人】  
「大変だ！大変だあっ！！  
オオカミが出たぞー！！」

【ナレーション】  
羊が、野生のオオカミに襲われたのです。

【羊】  
「メェェ、メェェ…！」

【ナレーション】  
どうすることもできないまま、羊の数はどんどん減っていき  
ました。

【村人】  
「ああ…、こんなに頑張ってきたのに、なんてことだ…！」

【ナレーション】  
二度に渡るオオカミによる被害を受けて、会輔社でも牧羊  
経営に対し反対意見を言う人も多くなり、政恒と会輔社の共  
同経営が成り立たなくなってしまい、政恒一人で経営してい  
くことになってしまいました。



## にのへ牧羊物語



【ナレーション】  
政恒は相談する相手もいなくなり、

【政恒】  
「これからは、責任の一切はすべて私にあるのだ。」

【ナレーション】  
と、重圧が一気にのしかかってきました。  
そしてさらに悲しいことは続き、政恒が一番たよりにしていた小保内定身が、病気で亡くなってしまったのです。

【定身】  
「新しい仕事には、必ず困難がつきまとう。  
その困難こそが、天が与えた試練だと思わなければならない。」

【ナレーション】  
それが最後の言葉でした。  
しかし、経営の行き詰まりは決定的なものとなり、雇い入れた者たちも次々と牧場をやめてしまい、途方に暮れた政恒は、

【政恒】  
「みんなのためにも頑張りたい。  
だが、お金も羊もなくなったらは続けていけない……。」

【ナレーション】  
くやしさをいっぱいにもいながらも、とうとう牧羊をやめる決意をしたのです。

## にのへ牧羊物語



【ナレーション】  
しかし、政恒の努力を、しっかりと見ていた人がいたのです。  
国の農務局から、二戸の様子を見にきた局長は、政恒に言いました。

【局長】  
「土地はそのまま国が貸すことにするので、もう一度頑張って、牧羊を続けなさい。」

【ナレーション】  
政恒はうれしさのあまり、震えがとまりませんでした。

【政恒】  
「くじけても、また立ち上がれればいいんだ。  
よし、一からやいなおしだ！」

【ナレーション】  
一緒に仕事をしてくれる農家を集め、力を合わせて土地を耕しました。



## にのへ牧羊物語



【ナレーション】

また、夜中に羊を襲うオオカミの群れを、日本刀を片手に待ち伏せたり、子羊を懐の中で温めたいするなどしてオオカミ退治に立ち向いました。

そのうちにオオカミも来なくなり、牧羊はだんだんと、岩手県各地に広がっていきました。

この後も、2度の火事に見舞われるなど、大変な苦勞が続きましたが、たくさんの人々の協力のおかげで、上野牧羊場の経営はついに順調に動きだしたのです。

## にのへ牧羊物語



【ナレーション】

そして、政恒はこれまでの経験を本にまとめ、多くの人々に牧羊の苦勞とすばらしさを伝えました。

その本は、非常に権威の高い賞を受賞しました。

このときが政恒にとって、新しい仕事に挑戦し、この土地へ根付かせようとした努力が世に認められ、花を咲かせた季節(とき)であったのです。

そして72歳で亡くなるまで、一生懸命に日本の牧羊のために尽くしました。

牧羊場はその後も代々ひきつがれ、「蛇沼牧場」として、今でも明るい牧草地の風景が、壮大に広がっています。

この牧場のシンボル、アメリカスズカケノキは、政恒の物語をきっと知っているはずです。

みなさんもぜひここへ来て、どうぞこの木に話しかけてみてください。

おしまい